

ゴレヤの炭坑

京都府 谷 口 信太郎

昭和十九年十月、二回目の召集を受けて満州へ渡りました。満ソ国境を流れるアムール川（黒龍江）に沿って関東軍の守備陣地が構築されていきました。そのうちの瓊瑋の部隊が沖繩へ転戦したので、その後の部隊へ入りました。晴れた日には大きな川の向こうに守備しているソ連兵が見えるくらいの近いところで、こちらも堅固な陣地を築いて、開戦になれば必ず進攻してくるであろうソ連兵を撃滅する態勢が整えられていきました。我が方の部隊は連日若い召集兵（元満州開拓義勇隊のようでした）の訓練をしていました。

昭和二十年七月、瓊瑋の一般邦人、軍人家族、開拓団の人々は新京（現在の長安）などを目指して避難を始めていました。現住民の動きも油断のならない様子を示していました。八月九日、東満国境をソ連軍の戦

車部隊が突如として攻撃して来たという情報が入り、我々の陣地もいつ戦場になるかも判らんと一層警戒を厳重にしていました。

八月十五日、部隊司令部に「日本国はアメリカなど連合国に無条件降伏した」という連絡が入ったので一同愕然としたのでした。早くも日本敗戦を知った現住民は各戸に青天白日旗を掲げて反抗の空気が濃厚になり、避難して空き家になった邦人の家はたちまち略奪の的になりました。我々守備隊は治安維持のため市内に出動しましたが、成果は上がりませんでした。営々として築き上げられて来ましたが日本の北辺守護の満州も、ソ連の暴虐の攻撃に音を立てて崩壊してゆきました。血と汗と莫大な資金が注がれた壮大な先人の計画は消えてゆくのでした。

昭和二十年八月二十一日、我々はこの瓊瑋でソ連軍によって武装解除されました。我々は武装はなくなり一介の国民の一人になりましたが、これからどうなるのだろうか、捕虜なのだろうかとあれこれ考えているうちに、この地帯に日本の部隊が結集して来ました。

北満の秋は短く、野営のテントに冷たい雨が降って来るのでした。我々の周囲にはマンドリン（自動小銃）を持ったソ連兵が絶えず警戒していました。

九月十七日、労働大隊を編成して琿琿よりソ連領ブラゴエシチェンスクへとアムール川を渡りました。ライチハ収容所に五百人余りで入りました。作業はコルホーズ（国营農場）で馬鈴薯掘りでした。見渡す限り広々とした畑で、馬耕で畑にとび出た薯を収穫するものでした。土の中に薯を残してはならんと監督は我が作業隊長にどなっていました。コルホーズの作業員も大勢出て拾い集めていました。大きな籠に入れて一輪車で収納舎に運ぶのですが、こんな仕事が当分続きました。

馬鈴薯畑の仕事が終わった頃は秋も過ぎ、そろそろ冬に入った頃移動がありました。我々作業隊は貨車に乗せられ半日ほど走った町、ゴレヤへ着きました。収容されたところはドイツ兵の捕虜が入っていたという鉄条網に囲まれた古い平屋の建物が並んでいました。部屋の中は木造の二段ベッドがあり、五十人くらい入

れる部屋が並んでいました。翌日は作業はありませんでしたが三日日から石炭掘りが始まりました。ここは露天掘りで、寒風の中、作業隊を二つに分け、上にある土を取り除く組と、石炭を掘る組に分けられました。石炭掘りの方は現地人の熟練した男性がダイナマイトを次から次へと装着して、そして大声で合図して点火してゆきます。大音響と共に連続爆発する様子は実に凄いものでした。先の丸くなった鶴嘴で掘り起す者、貨車に積み込む者、貨車のレールを敷き替える者。二十両余り連結された貨車に石炭が積み込まれ出て行くと、やれやれと思う間もなく待ち構えていた空車が入って来るので、ちよつとの間も休めない息の詰まるような作業でした。

昭和二十年も暮れ、ソ連での新年を迎えましたが何の変化もありません。寒い最中でもあったので一日と二日は作業休みとなりました。零下三十度より下がると休みとなりますが、二十五度では作業に出かけます。冷たい風が吹き荒れるときはまぶたや鼻の穴が凍てつき、押さえるとバシバシと音がします。監督の

「ヤボンスキー、ダバイ」に追いたてられて石炭掘りが始まります。食事は相変わらず貧しいもので、朝食は雑穀のうすいカーシャ（粥）が飯盒の蓋に八分目ほど、昼は黒パン三〇〇グラムのみ、夕食は朝より少し固めの雑穀のカーシャと青いトマトの入ったスープ（塩汁）、これが重労働をする我々の食事です。栄養失調で痩せ細ってゆく者が増えてきます。休憩時間にはせめて内地のうまいもの話をして空腹をなくさめていました。

昭和二十一年の夏頃から一週間に一度、收容所内の風呂に入ることが出来ました。入る時に服や下着を番号札と交換で出して置くと熱気消毒をしてくれますので虱や蚤退治には大助かりでしたが、湯が少ないのに閉口しました。風呂はサウナ式で熱い蒸気が吹き出る中で、バケツ一杯ほどの湯で身体を洗って出て来るのですが、消毒された服が出て来るのはいつも十分ほど遅く、夏はよいが冬はその待つ間が寒く、ベチカに抱きついていました。内地の湯が溢れる風呂がなつかしく、水の豊かな日本が偲ばれました。

昭和二十二年秋頃、希望者を募って共產主義の特別教育に三十人余り派遣されました。私も申し込んでその一員となりました。当時、ハバロフスク発行の日本人向け思想教育の『日本新聞』が各兵舎に配られて民主化（共産化）運動が進められ、我々特別教育を受けた者が收容所に戻った頃から一層盛んになりました。

夕食後の憩いの一刻、各兵舎に集まって一時間余、我々が指導メンバーとなって、天皇制反対、財閥・地主の搾取反対、資本主義の滅亡など、洗脳に反対する者は帰国が遅れるなどの話もあり、ひたすらお手伝いをするより方法がありませんでした。

三年目も作業は変わりません。露天掘りの石炭はほとんど掘られていきます。貨車のレールを移動しながら、毎日ハッパの轟音を響かせていました。

昭和二十三年九月、突然、装具を持って乗車せよと命令が出ました。作業場の移動かダモイ（帰国）か、どきどきしながら貨車に詰め込まれました。進むに従って行く先はナホトカと判り、暗闇に燦然と輝く太陽を見る思いでしたが、日本の引揚船に乗るまでは心

を緩めてはなるまいと自戒しつつ、戦友と肩をたたき喜び合うのでした。

ナホトカで数日間、最後の民主教育を詰め込まれましたが、九月十九日、緑滴る祖国日本、舞鶴に上陸しました。

森林伐採のコムソモリスク

京都府 松本 長四郎

内地から遠く離れた満州にも内地の戦況が耳に入り、風雲急を告げる切迫した状況の昭和二十年三月八日。当時、建設会社に就職していた籠江省白城子で現役入隊した。部隊は鞍山高射機関砲隊であった。入隊翌日から激しい教練が行われた。八月に入って北朝鮮の輪城北方の魚遊洞というところの整備についていた。八月十五日、アメリカの飛行機一機がピラを播いて行った。そのピラによると、日本は連合軍に無条件降伏したと言う。日本は負けたと言うのだ。思いもか

けぬ事態だ。諸天に護られている神国日本が戦争に負けるなど思いもよらぬこと、茫然自失、我々兵隊は捕虜として一生苦役に従事するのか、内地の男性は皆アメリカに連行されるのか、不安な気持ちを語り合った。上官から「冷静に状況を見定めて、軽卒妄動をしないよう」と指令が出た。

二、三日は何事もなかったが警備していた。山を下り小銃の菊の紋を消せと命令が出た八月二十日頃、ソ連兵が初めてやって来て、所持品の検査をして兵器一切引き上げて行った。我々は武装解除されたのだ、どうなるのか不安は日々深くなるばかりだ。

北朝鮮の満州との国境近くの古茂山というところへ連れて行かれた。我々はいつの間にかソ連の指揮下に入れられ、ソ連兵のマンドリン（自動小銃）で拘束されていたのである。作業命令が出て、最初の作業は、終戦で大混乱している清津港の整備や羅津港での兵員輸送用の二段ベッド作りなど、方々の作業に引つ張り回された。その時宿舎が火事に遭い、持ち物全部灰となくなってしまった。ソ連から毛布や衣類など支給された